山寺芭蕉記念館だより

《山形の山寺　立石寺・仁王門》坂田 燦 作　1990

●事業報告　特別展「江戸絵画の美」

●アプローチ・芭蕉＆日本文化
　ボローニャと山形の若い世代の俳句交流会を開催しました

●収蔵品紹介　「月二題」懐紙に見る俳人立圃（りゅうほ）の公家たちとの交流

No.34
2023年3月発行

事業報告

特別展 江戸絵画の美

―絵師から文人・俳人まで、その趣向と魅力―

この展覧会では、江戸時代の絵師・文人・俳人などの手になる様々な絵画を紹介しました。これらの作品を通して、江戸絵画の美とその魅力に触れていただこうと、二〇二二年十月七日から十一月二十三日まで開催されました。

江戸絵画の諸表現

江戸時代、絵画の世界では、室町時代より勢威を誇っていた狩野派が、武断政治から文治政治へと変わってゆく時代の流れを受けて、従来の絢爛な桃山絵画様式から、清雅で淡泊な江戸狩野様式に変化していきます。一方、他の絵師たちの中には、自由な表現方法を取り入れ、新たな感覚で描いた作品が見られるようになります。

また、絵師以外の人が絵を描くことも多くなり、学者などによる文人画といわれる分野の絵も多く描かれます。俳人松尾芭蕉も狩野派に学んだ絵師と交遊しつつ画技を習い、味わいのある絵画作品を残しています。

江戸中期の与謝蕪村は俳人として活躍する一方、画家として多くの作品を残していますが、写実的画風の南蘋派から俳画まで幅広い画風を自分のものとし、日本南画については池大雅と共にその大成者として位置づけられています。「雪中双鴉図」は、蕪村の詩情あふれる画風で描かれた名品です。

江戸後期の谷文晁は、天明八年（一七八八）田安徳川家の奥詰となり、文化期（一八〇四～一八）の半ば頃からは多作になり、関東画檀の重鎮として活躍しました。

江戸後期に出羽国楯岡に生れた丸野清耕は、江戸で狩野派に学び、帰郷後上山藩の御用絵師として活躍し、彩色画に優れました。今回公開した「山水図」三幅対は新出資料で、初公開となりました。

《海鶴蟠桃図》谷文晁 筆
江戸後期（18～19世紀）
㊫長谷川コレクション・山形美術館蔵

《雪中双鴉図》
与謝蕪村 筆
明和7～安永6年
（1770～77）
慈光明院蔵

新出資料《山水図》（3幅対の2幅）丸野清耕 筆
江戸時代（19世紀）個人蔵

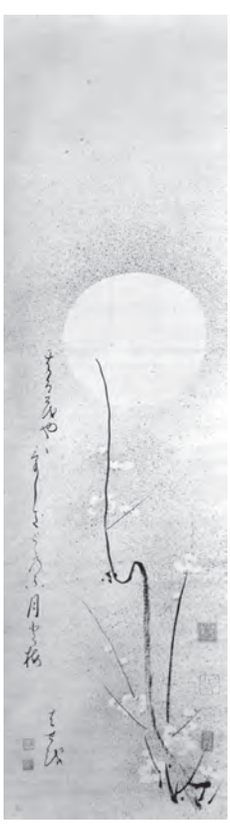
県文《浪花住吉月出見の図》
歌川広重 筆
江戸時代（19世紀）
慈光明院蔵

歌川広重は浮世絵師歌川豊広に入門、風景画を得意とし、代表作「東海道五十三次」の他にも名所絵を多く残しています。気象現象や霞などの幽かな空気感の表現にも長け、肉筆画「東都佃島住よし図・京都嵐山図・浪花住吉月出見の図」の三幅対では、佃島の雪景や嵐山の桜、大坂住吉浜の月夜を巧みに表現しています。

俳画の表現

俳画は俳諧・書・画が一体となって風趣を醸し出す芸術です。その始祖とされるのが江戸前期の画家で俳人の野々口立圃です。

「はるもやゝ」発句画賛は、芭蕉の句「はるもやゝけしきととのふ月と梅」に併せて、門人の森川許六が月と梅の絵を描いた名品です。



市文《「はるもやゝ」発句画賛》
松尾芭蕉 賛・森川許六 筆
元禄6年（1693）本館蔵

事業報告

特別展

坂田燦（あきら）の「おくのほそ道」版画展

この展覧会は、画家・版画家の坂田燦氏が「おくのほそ道」をめぐる一人旅を続けて、令和二年（二〇二〇）まで三十年をかけて完成させた全六十三点の版画が、同氏により寄贈されたことを記念して、二〇二二年六月三日から七月十九日まで開催されました。

坂田燦氏は昭和十一年（一九三六）熊本県生まれで、教育に従事する傍ら、版画の制作に取り組みます。昭和五十年（一九七五）、熊本県立宇土高校で指導して出版された「イワンの馬鹿版画集」は国内外で話題になりました。その後、熊本県立美術館の学芸課長、副館長、顧問を歴任され、退職後、平成二十九年（二〇一七）、第四十五回熊本県芸術功労者顕彰を受賞されています。

平成二年（一九九〇）に坂田氏は初めて山寺を訪ね、第一作となる「山寺・立石寺」を三カ月かけて制作します。「立石寺は私の『おくのほそ道』の原点」と語られる坂田氏は、これを皮切りに「おくのほそ道」の足跡をたどり、旅の情景と芭蕉の俳句の心象風景を白と黒の木版画で表現してきました。それらは情緒あふれる絵として結実し、時には繊細に、時には大胆で迫力ある構図で表現され、見る者の心を動かします。本展覧会は、「おくのほそ道」の旅を、叙情に満ちた坂田氏の版画で追体験できるものとなりました。

《立石寺と芭蕉》平成２年（1990）
坂田 燦 作

《日本海の夕涼み》令和２年（2020） 坂田 燦 作

オープニングで展示解説をする
坂田燦氏

予告

特別展

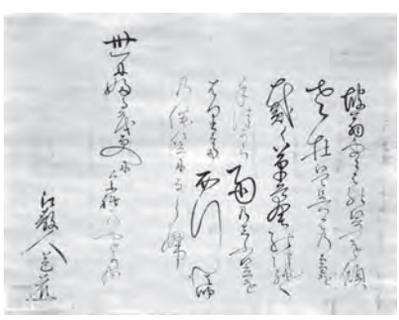
芭蕉と蕪村

令和5年9月1日（金）～10月9日（月・祝）

松尾芭蕉は、俳諧が言葉遊びの文芸だった中で江戸俳壇に登場して、奥の細道行脚などを通して、俳諧を深化させて芸術の域まで高めることに成功しました。

一方、芭蕉没後の二十二年後に生まれた与謝蕪村は、形骸化した当時の俳壇の中で起こった蕉風復興運動の中心の一人でした。また、画業でも大きな足跡を残している蕪村は、俳諧と絵画を融合させた俳画の大成者としても知られています。

本展では、芭蕉の真筆や関連資料によって芭蕉の俳文学の軌跡を辿ると共に、与謝蕪村の俳諧や画業などの足跡をたどり、江戸俳諧の巨人二人の作品を紹介いたします。



市文《「世にふるも」句文懐紙》
松尾芭蕉 筆
天和元～貞享元年（1681～84）
本館蔵

市文《黄石公図》与謝蕪村 筆
明和７～安政６年（1770～77）
穎原退蔵・尾形仂コレクション、本館蔵

予告

企画展

妖怪の文学・美術（仮称）

令和5年7月21日（金）～8月28日（月）

妖怪は古来より様々な文学や美術の中で取り上げられてきました。松尾芭蕉も紀行文『おくのほそ道』の中で、妖怪〝九尾の狐〟の殺生石（せっしょうせき）について触れています。この展示では、江戸時代から現代までの絵画や文学作品などによって、妖怪が日本文化の中でどの様に表現されてきたのか紹介いたします。

《三国妖婦伝》（部分図）
二代歌川国貞 画 元治元年（1864）
本館蔵

第14回 山寺芭蕉記念館英語俳句大会実施報告

英語俳句―相互理解への早道

大会実行委員会委員長　大場　登

「山寺から世界へ」を目指して十四年前に始まった本大会は、多くの方々からご理解・ご協力を頂き、成功裏に終えることができました。

今回は、募集期間が七月一日～八月十九日と昨年より十二日間も短かったにもかかわらず、海外二十七カ国を含む、三部門合計して参加者二千四十九名から二千七百五十九句の応募がありました。『入選作品集』に掲載された入選者は三百二十六名、三百七十四句。厳しい選考結果となりました。

審査には、飯島武久山形大名誉教授が審査員長、大場登同大会実行委員会委員長、万里小路譲山形県詩人会副会長、翻訳家リサ ソマーズ氏、並びに相馬周一郎山形市文化振興事業団理事長の五名が当たりました。

優れた作品が多い中、特に目立ったのは、各部最優秀一句、優秀二句の入賞作品。いずれも簡潔で、含蓄に富むものばかりでした。ご案内の通り、大まかな英語俳句の定義は、「一～三行からなる短い英詩（押韻しなくてもよい）、五・七・五の音節や季語は必ずしも守らなくてもよい」となっております。英語俳句の詠みの対象は、日本の俳句同様、花鳥風月が多いのですが、人間の心の動きや心理や哲学的な内容などが含まれ、より幅広い題材になっています。したがって、英語俳句を鑑賞したり作句したりすることにより、異国に住み、違った考えを持つ人達が、今や世界共通となった世界最短の文学形態である俳句に取り組むことが、世代間や国際的相互理解の早道であると信じております。今後も、国内外の老若男女、特により多くの若い人たちが、英語俳句を愛好され、更に友好の輪が広がればと願っております。以下、各部門の最優秀賞作品四句を掲載いたします。

第1a部：一般（日本人）

岸本　瞳（兵庫県）

a gray heron
stands gazing
at nothing
青鷺のじっと見つめる虚空かな
（作者訳）

第1b部：一般（外国人）

Nina Kovačić（クロアチア：Croatia）

rumors of war
on the white tablecloth
a crushed strawberry
戦争の噂 白布に つぶれたイチゴ
（万里小路 譲 訳）

第2部：高校生

平山　恵（岩手県立大船渡高等学校2年）

onto the beach
was washed
a wish
砂浜に うち寄せられた 願い事
（作者訳）

第3部：中学生

菅原 茉子（宮城県古川黎明中学校3年）

Hermit crab is walking
forever alone
but alive
ヤドカリが歩いている いつまで
もひとりぼっち でも生きている
（作者訳）

事業報告

第29回 山寺芭蕉記念館文化セミナー

東北歴史探訪

―「みちのく」の文化、その歴史と深層―

第二十九回山寺芭蕉記念館文化セミナーは、「東北歴史探訪」をテーマに三回開催し、三人の講師がそれぞれの専門的視点から、東北の歴史と文化の深層を探りました。

山本陽史 氏

蟹澤聰史 氏

山口博之 氏

十月二十九日は、山形大学学術研究院教授の山本陽史氏の「義経の旅、芭蕉の旅」。奥の細道の旅は、源平の戦にまつわる人々の足跡を訪ねる目的もありました。芭蕉が旅した元禄二年（一六八九）は、義経が平泉で滅ぼされてから満五百年の節目の年でした。みちのくには義経伝説が多数残されていますが、旅人芭蕉の目に義経の面影がどう見えたのかを探りました。

十一月六日は、東北大学名誉教授の蟹澤聰史氏の「『おくのほそ道』にみられる芭蕉の自然観」。『おくのほそ道』を地質学の観点から見たお話でした。日本列島は、中緯度地方に位置し、沈み込み帯で火山や地震が多く、四季折々の変化に恵まれた立地条件を持ちますが、そうした自然環境が『おくのほそ道』の中で、芭蕉の自然観・哲学に大きく影響を与えていることを解説いただきました。

十一月十二日は、東北学院大学東北文化研究所客員の山口博之氏の「立石寺開創の頃」。立石寺がその姿を現した古代の状況を踏まえ、遺跡や当時の仏教の実態を通して立石寺開創の背景を解説。更に、開山伝説である磐司磐三郎伝承や当時の交通路などから、街道と立石寺の関係性についても読み解きました。

事業報告　第65回　全国俳句山寺大会

芭蕉翁の山寺来訪を記念し、七月に実施される全国俳句山寺大会は、今回諸般の事情により事前投句のみの紙上大会として開催しました。投句数は一四五九句でした。各賞は次の通りです。

山形市長賞・細谷喨々選 特選

待春の目をもらひたるこけしかな
大阪府　今井　文雄

山形県俳人協会長賞・鈴木正子選 特選

大凧へ記せる名前の初子かな
神奈川県　尾崎千代一

山寺文化保存会長賞・牧　静選 特選

朝東風や小さき踏台ある厨
秋田県　種村聖巴子

山寺芭蕉記念館長賞・阿部月山子選 特選

鱗には子供の手形鯉のぼり
山形市　横道　啓一

増成栗人選 特選

山寺を登りきつたるかたつむり
栃木県　阿久津勝利

神野紗希選 特選

地歴部の化石とバレンタインの日
岩手県　小山　尚宏

伊藤　寛選 特選

春野行く優しい心もどるまで
神奈川県　松見喜美子

牧　静選 特選

野葡萄のからみつきたる子規の句碑
村山市　小室けい子

新盆や畳に残るベッド跡
山形市　横道　啓一

山間を一気に駆ける威銃
上山市　堀川　栄助

伊藤ふみ選 特選

秋草やダムは荒肌さらけ出し
新庄市　柏崎　寿宣

走り蕎麦打つも茹でるも長名水
東根市　菊地みさ子

小望月部屋の灯りをすべて消し
東根市　冨樫　正義

予告　第66回　全国俳句山寺大会

【選者】細谷喨々・阿部月山子・鈴木正子・伊藤　寛・牧　静・伊藤ふみ（敬称略）

【日時】令和五年七月九日（日）午前九時受付開始

【大会参加費】一、〇〇〇円（当日受付にて）

【大会投句】嘱目二句（午前十一時締切）

【賞】細谷喨々先生
特選一句　賞状・選者色紙染筆
秀逸十句　こけし
佳作五句　賞品
その他の先生
特選一句　賞状・選者色紙染筆
秀逸三句　選者短冊染筆
佳作五句　賞品

俳句大会　次第

〔午前十一時　開会〕
大会式典（主催者・来賓挨拶、選者紹介）・兼題句（事前投句）選評
〔昼食休憩後〕
講演　細谷喨々先生
入選発表・選評・表彰
〔午後四時終了予定〕
※大会参加者には記念品を進呈いたします。

事業報告　第53回　芭蕉忌俳句大会

芭蕉翁が亡くなった時期にあわせて開催される芭蕉忌俳句大会は、今回諸般の事情により、事前投句の募集を行い、令和四年十月二十三日に発表・表彰のみ行いました。事前投句数は四八六句。当日の参加者数は三十七名でした。特選句は次のとおりです。

阿部月山子選 特選

踏みしむる火渡りの燠天の川
山形市　栗山じゅん

焼畑の課外学習蕪を蒔く
鶴岡市　本間　まり

流星やピッケル振れば触るるほど
遊佐町　小松　恵子

鈴木正子選 特選

新盆や畳に残るベッド跡
山形市　横道　啓一

枝豆の莢に空室一つあり
庄内町　齋藤八重子

焼畑の課外学習蕪を蒔く
鶴岡市　本間　まり

伊藤　寛選 特選

大杉の幹真っ直ぐや水の秋
山形市　小関　恵子

先導は老夫の鎌や稲を刈る
東根市　阿部美和子

赤とんぼ関所の槍に翅休め
庄内町　齋藤八重子

令和４年10月23日に行われた事前投句の発表・表彰

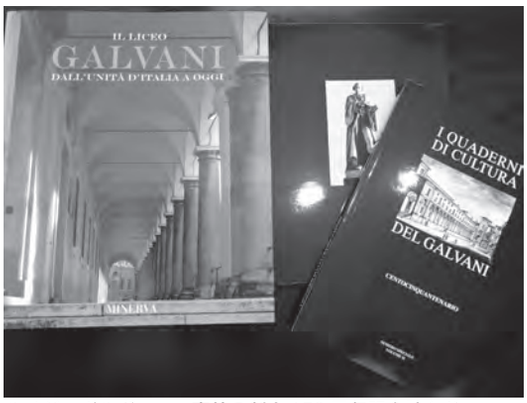
アプローチ・芭蕉&日本文化 15

ボローニャと山形の若い世代の俳句交流会を開催しました

山本陽史（はるふみ）

二〇二三年二月、イタリア・ボローニャ市を訪問しました。私は一〇八八年創立のヨーロッパ最古のボローニャ大学と山形大学の交流を進めてきました。コロナ禍の間はオンライン等での交流にとどまり、現地を訪問できたのは三年ぶりです。

今回の訪問の目的の一つはボローニャで二五〇年以上の歴史を持つルイジ＝ガルヴァーニ高校と山形大学小白川キャンパス（山形市）をオンラインでつなぎ、それぞれ俳句を作って披露し合うイベントを開催することでした。



ルイジ＝ガルヴァーニ高校の創立 150 周年記念誌など

主催は山形大学の地域共創ＳＴＥＡＭ教育推進センターです。「ＳＴＥＡＭ（スチーム）教育」とは、文系と理系の枠を超えた課題発見・探究学習のことです。今回の催しの主な目的は、俳句を通して日伊の若い世代が交流することで、世界の中の日本文化の位置を意識してもらうことです。

イタリア側は高校生二十二名、山形側は「俳句甲子園」に出場歴のある山形東高校・山形南高校の生徒と中学生・小学生たち合計二十名が集まってくれました。

二月二十三日、日本とイタリアには八時間の時差があるので、双方が集まれる日本時間午後四時（イタリア時間午前八時）からスタートしました。冒頭、玉手英利山形大学長とガルヴァーニ高校のファビオ・ガンベッティ校長からスピーチがありました。

続いて私がイタリアの高校生たちに俳句の説明を行いました。異なる文化を紹介する、いわば「文化の翻訳」のための工夫を知ってもらうため、山形側にもこの模様は視聴してもらいました。

なお、通訳は井上ひさしの戯曲「父と暮らせば」のイタリア語訳者の一人、青山愛さんとボローニャ東洋美術研究所長のアレッサンドロ・グイディさんにお願いしました。

さて、イタリア語での俳句作法のルールとして高校生たちに二つのルールを示しました。

一．三行で短い詩を作る

二．季節を表現する言葉を入れる

このようにルールをシンプルに二つに限定した理由は以下の通りです。ヨーロッパ言語でも十七単語で作るべきという考えで指導している指導者もいらっしゃるようですが、私は言語の構造、特に母音と子音の組み合わせや助詞の有無などが異なるためそれを課するのは非常に困難と思われます。

また、自然や文物・生活習慣も大きく異なるため、日本の伝統的な季語や季節感にとらわれず、その地域の文化を尊重する方が良いと考えました。

日伊双方ともいくつかのグループに分けて、グループで話し合って俳句を作り提出してもらいました。山形側の作句は東北大学大学院生の浅川芳直さんの指導で進行しました。

俳人の武田菜美さんにもボローニャにご同行いただきました。武田さんは以前もボローニャで地元の中学生や一般の皆さんの俳句講座で奮闘していただきました。

高校生の作ったイタリア語の三行詩を青山さんに日本語訳してもらい、武田さんと私で五七五の日本語にして短冊に書きました。そして各グループごとにイタリア語俳句の清書と短冊を並べて見せながらオンラインで山形側に披講しました。山形側の俳句も説明を付けてイタリア側に披講しました。双方盛んな拍手が起きて盛り上がりました。

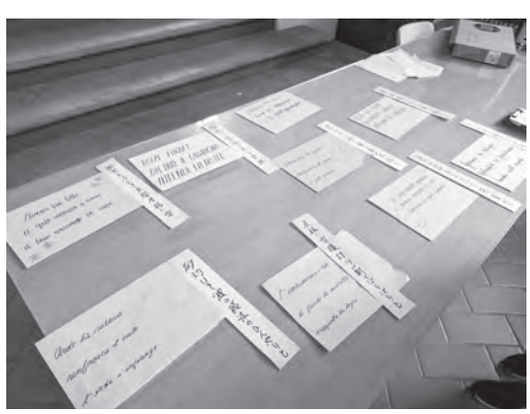
私たちが翻訳の作業をしている間には、学校生活などについて双方の児童生徒たちで英語やイタリア語での質疑応答が行われました。

コロナ禍によって社会にはさまざまな不自由が生じました。対面や移動がはばかられ、やむを得ずオンラインを活用して教育や交流などを進めざるを得なかったわけです。ただ、対面が大幅に再開されても、オンラインをすべて止めてしまうのではなく、活用を図るべきと私は考えています。

今回、オンラインが空間を超えてつながることができる特性を生かし、現地に出向いての対面型講座と組み合わせた交流が実現しました。ウィズコロナ時代の新しい教育と交流スタイルとして確立していきたいです。

イタリアの高校生からは「連句にも挑戦したい」という声が上がるなど、俳句、そして日本文化への関心を高めてくれたようです。今後も改善しつつ交流を発展させていきたいと思います。

（山形大学学術研究院教授、東京大学生産技術研究所リサーチ・フェロー）


イタリア側の高校生の俳句と日本語訳

収蔵品紹介

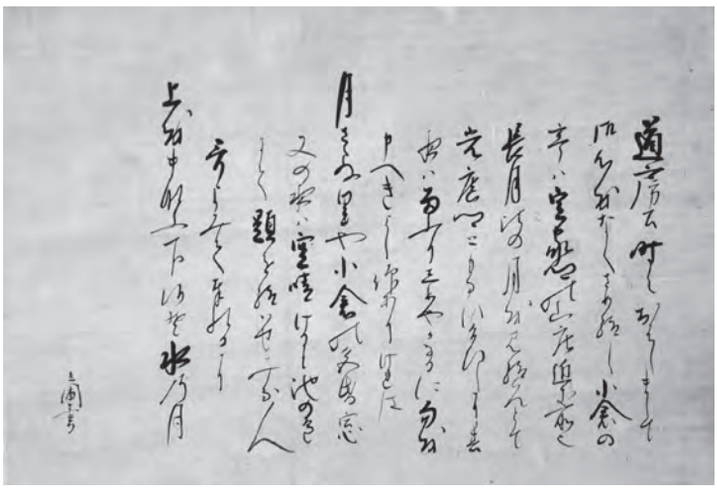
「月二題」懐紙に見る俳人立圃の公家たちとの交流

中野 沙恵

月二題　一幅
紙本墨書
野々口立圃 筆
江戸期（一七世紀）
頴原退蔵・尾形仂コレクション

〔解読〕

道房公時々おはしまして
御心をなぐさめ給し小倉の
亭ハ定家卿の山庄近き所也。
長月頃の月を見給ハんとて
光廣卿ともなひ給ひしに、其
夜ハ雨ふりしめやかなるに、句を
申べきより仰ありければ
月さゝぬ里や小倉の色帋窓
又の夜ハ空晴けるに池の邊
にて題を給ハせ、みな人
哥よみて奉れるに
上をまなぶ下候ぞ水の月
立圃書印



〔口語訳〕

九条道房公が時々御出になって御心を慰めておられた、京都嵯峨の小倉亭は、かの藤原定家卿が百人一首を撰したという山荘に近い所である。旧暦九月ごろの月を道房公がご覧になろうと、烏丸光広公と連れ立っておいでになられた。が、その夜は雨がしめやかに降っていたため、「発句を詠みなさい」と仰せがあったので月さゝぬ里や小倉の色帋窓（月はささないが、この里は定家卿が小倉色紙を貼ったという山荘が近いところで、茶室にも色紙窓を見ることよ）

次の日の夜は空が晴れたので、池のほとりで和歌の題をお出しになり、皆が和歌を詠んで献上なさったときに（発句を詠みました）上をまなぶ下候ぞ水の月（上を真似する下の者がおりますぞ。それは池の水に映る月です）

〔解説〕

京都嵯峨野の小倉（現、京都市右京区）にある、九条道房の亭（休養などのための邸）に、旧暦九月ごろの月を観賞しようと、九条道房が烏丸光広とともに訪れたが、あいにくの雨だったため、立圃に発句を詠めと命があって詠んだ句と、次の日の快晴の夜は、池のほとりで道房の出した和歌の題によって参会者が歌を詠んだ折の立圃の発句とが並ぶ。旧暦八月十五夜の名月とともに九月十三日の月も後の月として、古来愛でている。

小倉といえば、『新古今和歌集』の撰者の一人としても知られた藤原定家（一一六二～一二四一）が小倉山麓の山荘で百人一首の色紙（小倉色紙）を障子に貼った、と伝え、その定家の山荘にも近い。「月さゝぬ」の句は、雨夜で月の光はないが、この小倉の里はかの定家卿の小倉色紙に所縁があり、茶室の窓も色紙窓（茶室に設える窓で、色紙形を散らして貼り付けた形に似るところからの称）である、と小倉の地を中心に置いた作となっている。ちなみに、現存する色紙で、定家筆の小倉色紙がもっとも古い、という。

二句目は、夜空の月と池の水面に浮かぶ月を詠んでいて、あわせて雨月と明月の二句で対比させている。

作者の野々口立圃（一五九五～一六六九）は京都の人。名は親重。雛人形の細工を家業とし、屋号を雛屋という。紅粉染めにも巧みで紅屋とも称した。若い時から連歌を猪苗代兼与に学び、和歌を烏丸光広に、俳諧は松永貞徳に、書道を青蓮院尊朝法親王に習ったという。古典に通じ、画も巧みである。福山藩主水野勝成に俳事をもって仕えたこともあり、江戸で暮らした時期もあった。

詞書に見える「道房公」は九条道房（一六〇九～四七）。右大臣、左大臣、摂政を勤めた。「光広卿」は権大納言の烏丸光広（一五七九～一六三八）。歌人としても活躍したほか、書画もよくした。妻の父、細川幽斎から古今伝授を承けている。

この月見は光広が没した寛永十五年七月より以前の出来事と知られ、寛永十七年江戸に出る前の事であった。立圃は職人の身分ながら京都の公家や僧侶などと風交があったのだ。

（聖徳大学名誉教授）

やまでら歴史民俗散歩 29

「宝珠山 立石寺図」に見る江戸時代中期の立石寺の姿

「宝珠山 立石寺図」

山寺地区に文化年間（一八〇四～一八）に描かれたと伝わる「寶珠山立石寺図」が残されている。縦一七一cm×横二八二cmの大画面で、四十八枚の和紙が貼り合わされている。図の左下には「御朱印高千四百弐拾石此内配當有之　天台宗　東叡山末　出羽國村山郡山寺　寶珠山　立石寺」と奥書がある。本図に落款はないが、遠藤周鶴（しゅうかく）によって描かれたものと伝わっている。周鶴は本名、金兵衛。別号に雲松窟がある。明和六年（一七六九）生まれ。立石寺役人を勤め、「風交非常に広く、毎年新年には雅会を開き、刷物さえ出している」[註1]といい、天保十二年（一八四一）、七十三歳で没している。本図を所蔵する遠藤俊英氏は周鶴の子孫にあたるので、周鶴筆であるという本図の来歴は信頼できよう。

本図の構成は、西方端に山寺入口の門と地蔵堂を置き、東方端に岩ノ沢を配している。南端は米山薬師・大日堂から始まり、東から西に流れる立谷川を下部に、そこからそびえる寶珠山と奥の院まで続く多くの堂宇を描き、その山の裏側に位置する子安観音を北端に置いた構成である。

寺院の記載について注目してみると、山門に入ってからの山上の寺院には、現在も存続する奥の院、華蔵院、中性院、金乗院、性相院の他に、宝幢院、善行院、圓乗院、不動院、中之院、沢之院、極楽院などの現在は廃寺となっているものも確認できる。

次に、立谷川の門前町付近に架けられた橋に注目すると、今日、対面石の東脇に架けられた宝珠橋が高橋という旧名で記載されているが、本図では対面石の西側に描かれている。また、高橋の少し上流に大神橋があり、中洲を経由して対岸まで架けられている。この橋は明治三十五年（一九〇二）田楽淵の堤防が決壊し流され、翌年に架け直されるも再び流され、今日では見られない橋である。

周鶴の「寶珠山 立石寺図」は、山寺立石寺の歴史を検証する上でも貴重な史料といえるであろう。

（本館学芸員　相原一士）

註1『山寺百話』伊澤不忍著・伊澤貞一編　一九九一

〔参考文献〕
『山寺百話』伊澤不忍著・伊澤貞一編　一九九一
『山寺芭蕉記念館紀要』第四号「資料紹介〔山寺　寶珠山立石寺〕」相原一士　一九九九

山形市山寺芭蕉記念館だより No.34
令和五年三月三十日発行
編集・発行　（公財）山形市文化振興事業団
山形市大字山寺字南院四二二三
電話 〇二三（六九五）二二二一
印刷　藤庄印刷株式会社

■**開館時間**：午前９時～午後４時30分
■**入 館 料**：大人400円（20名以上の団体は320円）
小中学生、高校生は入場無料。
障がい者手帳をご提示の方は無料。
■**休 館 日**：展示替のための休館日あり（お問い合わせ下さい。）
■**交　　通**：JR仙山線「山寺駅」から徒歩８分。山形自動車道「山形北IC」から車で約20分。

お茶席のお知らせ

下記のとおり、お茶会を開席しております。どなたでもお気軽にご利用下さい。

市 民 茶 会　一服〔抹茶とお菓子〕……600円
場所：山寺芭蕉記念館　茶室
日時：５月６日(土)、14日(日)、21日(日)、９月17日(日)、10月22日(日)、11月５日(日)〔各日、午前10時～午後３時〕。

茶房　芭蕉堂　一服〔抹茶とお菓子〕……500円　入館料とのセット券をお求めの場合770円
場所：山寺芭蕉記念館　談話室または茶室
日時：午前10時30分～午後３時30分（市民茶会の日、及び休館日は休席）

ホームページ　http://yamadera-basho.jp
携帯サイト　http://yamadera-basho.jp/m/
HP